

東京都三多摩公立博物館協議会報

No. 1 8

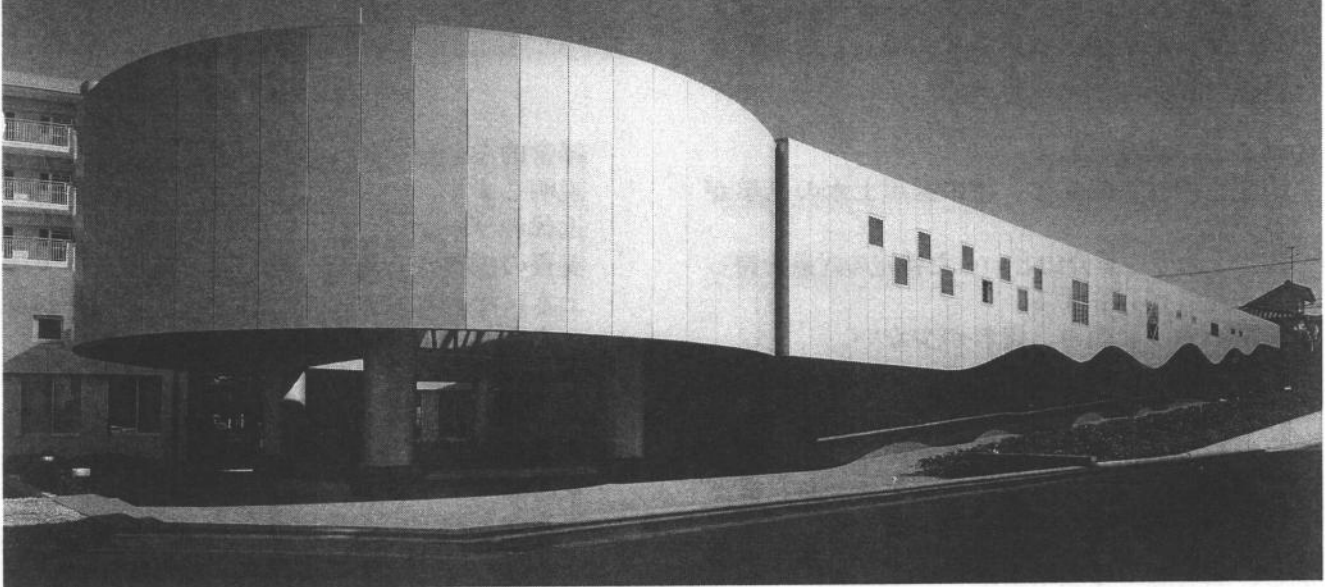
ミュージアム

多摩

発行

1997年3月31日

東村山ふるさと歴史館が開館



昭和40年に開館し、市民に親しまれた東村山市立郷土館を母体にして、新たに東村山ふるさと歴史館が平成8年11月24日に生まれました。では、館のようすを簡単ですが、ご紹介しようと思います。建物は住宅と合築です。しかし外からみると想像以上に立派な建物で、裏から見ないと上層に住宅があるとは思えません。武蔵野の木漏れ日をイメージしたスロープを降りてゆき、館の中に一步入ると高級マンションのエントランスと見まごうばかりの重厚なつくりのロビーが出現します。そして体験学習室・研修室・視聴覚室を左手に図書・AVコーナーを右手に見ながら、常設展示室へ導かれます。するとそこは、東村山の歴史とそれに関わった「みち」の世界が広がります。この中の目玉は、フィールドマップと呼ばれる市内散策のための映像などを駆使した大きな地図と市内にある文化財の模型などです。ここで学んで、外に出て本物に出会う、そのような2度おいしいカラクリになっています。そして忘れてはいけないのが、ふるさと歴史館の西方に歩いて15分の場所にあるかやぶき民家園です。周辺には、しょうぶで有名な北山公園や緑豊かな八国山緑地があり、文化財と史跡散策が1度でできる地の利があります。ここでは、昔懐かしいかやぶき民家園での暮らしやそこで使われていた農具と生活用具、民俗行事のようすなどを展示しています。そしてここでは、四季折々に特徴のある年中行事の体験学習も行っています。残念にも民家園で見られなかったかたのためにこのうち幾つかは、ふるさと歴史館のほうでも日を変えて実施します。その歴史館では、映画会や自然観察会、歴史講座など盛り沢山の事業を行う予定です。

と今までは表向きの文章を綴られさせていただきましたが、事業に関しては担当は不安顔です。郷土館時代からある程度の事業は行ってきたつもりでいましたが、博物館の事業としてやっていけるかどうかの心配です。市民の方たちが「私たちの博物館」という意識をもってもらえるような運営をと考えていますが、そのための事業計画は暗中模索状態です。また企画展や特別展の企画のこと…不安を数えればきりがありません。この記事がでるころは、どうにか運営をしているころでしょう。諸先輩方々におすがりすることが多々あると思います。そのときは、よろしく願い申し上げます。そして、今まで開館の準備でお世話になった方々にこの紙面をお借りしてお礼を述べさせていただきます。ありがとうございました。(東村山ふるさと歴史館一同)

常設展リニューアル

羽村市郷土博物館

昭和60年の開館以来、常設展については展示パネルや資料の入替えを随時行っていましたが、開館から年数を経るにつれて、展示什器や映像音響機器の故障、展示内容の不足が目立って感じられるようになってきました。

そこで、開館10周年を契機に、リニューアルを進めることになりました。これまでの入館者の傾向や、企画展等の事業の実績を踏まえ、地域に根ざした博物館としての方向性を探るために、平成3年度に国学院大学の加藤有次教授を座長とする展示検討委員会を組織し、基本的な方針をご検討いただきました。

これまでの現状として

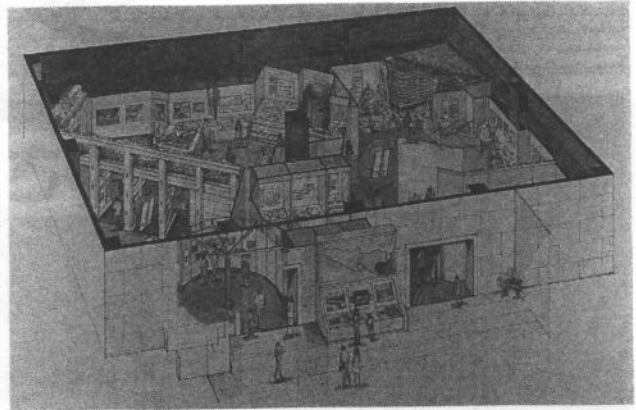
- ・小学生の社会科見学、特に玉川上水の見学が多い。
- ・玉川上水や中里介山といった特定の対象を持った来館者が存在する。
- ・解説パネルに偏り、資料が少ない。
- ・コーナーごとの特色が少なく、単調である。

等の点が挙げられ、これを基に、単なる時系列の通史展示から、地域の特色を生かした展示へと脱皮すること、展示室の空間を最大限に生かし、臨場感ある展示構成にすることが基本方針として示されました。

従来の展示では、自然・歴史・玉川上水のコーナーが独立し、特に相互の関連づけがなされていませんでした。そこで、玉川上水を羽村の自然的風土と精神的風土をつなぐ鍵として位置づけて、玉川上水を中心に展示を展開することとしました。

展示構成は、上水開削前を近世以来、玉川上水についてを近世、それ以後を近代にあてはめた3つのゾーンと、中里介山コーナーおよび企画展コーナーとし、実資料と模型・複製を織りまぜて、わかりやすく、より体感できる展示を目指しています。

- ・玉川上水開削以前のゾーン
羽村を取り巻く自然環境とそこにくらす人々の関わりをテーマに、縄文の集落から、近世の村落までを取り上げています。
- ・玉川上水のゾーン
実物大で再現した江戸期の木造の水門をくぐって入ります。このゾーン以降は玉川上水の影響下にあることを象徴しています。ここでは、特に小学校の社会科見学を意識し、玉川上水自体へも視点を向けています。また羽村では、上水管理や土木工事の入札などを通して企業



経営的な発想を持つ農民が現れてくることを説明します。

- ・近代のゾーン
養蚕の振興から現在へ続く流れの中で、玉川上水に培われた人々の活躍を通して羽村の歩みをたどります。
- ・中里介山コーナー
新しい介山論を基に、映像で中里介山の世界に迫ります。
- ・企画展コーナー
従来から展示の活性化のため、常設展示室内に設けていた企画展コーナーを発展継承したものです。

展示室内は、実物大で再現した江戸期と現在の玉川上水の水門などによって、各ゾーン・コーナーごとに空間を独立させ、さらにその空間を象徴させる情景再現模型と実資料を配して小空間をつくり、それぞれの時代を特徴づけるとともに、資料自体のもつ魅力や迫力をより効果的に印象づけるようにしています。

リニューアルの経過

- | | |
|--------|--|
| 平成3年度 | 展示検討委員会設置 |
| 平成5年度 | 展示検討委員会答申 |
| 〃 | コンペ実施 参加5社
決定会社
(株)トータルメディア開発研究所 |
| 平成6年度 | 基本計画策定 |
| 平成8年度 | 実施設計・展示工事施工 |
| 平成9年4月 | リニューアルオープン予定 |

復原模造 3年がかりで完成

あかいとどし
国宝「赤糸威鎧」—武蔵御嶽神社蔵—

青梅市郷土博物館

青梅市内には文化財が非常に多く平成8年4月現在、国指定16件、都指定44件、市指定135件、合わせて195件で近隣市町村に比べ、はるかに多い件数にのほっています。

この中で国宝に指定されているものは、武蔵御嶽神社蔵の「赤糸威鎧」と「円文螺細鏡鞍」の2点であります。

「赤糸威鎧」は明治32年に国宝指定された平安時代後期の作で、日本甲冑を代表する豪華な大鎧で、武蔵国府の実権者であった畠山重忠の奉納と伝えられています。

青梅市では、武蔵御嶽神社の御神宝として永く秘蔵され、日本の大鎧として代表されるこの鎧を多くの皆様にご覧いただき、その価値を知っていただくため、平成5年度から復原模造の製作が始まり3年の歳月を要しこのたび完成、郷土博物館で常時公開しています。

復原にあたり監修者は、広島県の厳島神社や奈良県の春日大社に伝来した製作当初の様式をよく保つ国宝の大鎧を長年にわたり調査した膨大な資料を参考としました。

また、武蔵御嶽神社の協力を得て、原品の緻密な調査を繰り返し、明治期の国宝修理作業での疑問点や付加部分を当初の姿に戻すため、最新の学術的成果を基に製作の工夫、古法による作業、材質の選定などあらゆる点で平安後期の様式を忠実に再現する努力をいたしました。

甲冑師としては、現在、福岡県の柳川藩立花家の甲冑修復に従事中である日本甲冑武具研究保存会評議員、西岡文夫氏に依頼しました。

この日本有数の大鎧の持つ歴史的、芸術的価値を身近に観賞できることは、多くの方々が文化財への関心を高めるために役立つことと思います。皆様のご来館お待ちしております。



館運営の活性化について

武蔵村山市立歴史民俗資料館

当館は開館以来15年が経過しましたが、当初から満杯であった収蔵庫は増設されず、常設展の大幅な変更もできず、2名という組織人員の増員も無く（この2名は文化財保護業務も担当している）、しかも市の財政事情により当初から新規事業がほとんど認められないというまさに八方ふさがりの中で館運営を行ってきました。他館の収蔵庫増設、収蔵システムの電算化、展示室へのビジュアル機器の導入、資料購入などの話を聞くにつれ、何もかも夢のまた夢といったありさまです。年に1回開催する特別展もすべて職員の手作りであり、ポスターやリーフレットの印刷の予算すら認めてもらえません。

そんな状況の下で、年1回の特別展、年数回の収蔵資料展、年数回の各種講座を開催してきました。とくに特別展の開催は館収蔵資料及び市内所在資料の系統的な目録作成を意識しながら行ってきたため、まだ限られた分野ではあるもののその資料蓄積は次第にふくらんできています。具体的には市指定文化財「指田日記」に関する展示及び日記の全文翻刻により、その利用、閲覧等の問い合わせ件数が大幅に増え、しかもその範囲も広域になりました。また、村山・

山口貯水池建設に伴う「軽便鉄道」に関する展示及び資料収集は市民、鉄道マニアの話題となり、全国の「水」資料収集機関からの問い合わせも寄せられるようになりました。

このほか当館のような小規模館では、否応なしに来館者の顔が直接見え、相手からも職員の顔が見えるという特徴があります。質問、資料の閲覧、情報提供、資料提供、世間話といろいろな目的で窓口の声をかけてくださる方々があり、そうした方々の話が今後の事業計画に新たなヒントや材料を与えてくれることが多々あります。こうした来館者を大事にし、できるだけ足を運んでもらえるように、短期間のミニコーナー展示の実施や常設展資料の一部入れ替えを行うなどの工夫をしています。

最後に、当館の課題は一刻も早く収蔵資料目録を作成し、公刊することです。どのような資料、データがあるのかを公にし、それらを学校教材、生涯学習教材・資料、研究資料として広く活用してもらおうという博物館本来の基本的業務の1つこそが当館にとっては館運営の活性化策になると考えています。

奥多摩郷土資料館

常設収蔵品展

奥多摩湖の湖底に沈んだ、小河内の山村生活用具（国指定）をテーマに展示しています。

- ・道と生活 奥多摩の人々は急峻な山と谷の間のわずかな緩斜面の段丘に家を造り生活しています。斜面とのたたかいは生活のすべてに及ぶが、道の解説と運搬具で表しています。
- ・山のしごと 奥多摩の山に杉・桧が植林され始めたのは明治以後です。それまでは小さな物は薪や炭に、大きな木は杣や小挽で建築用材につくりました。厳しい労働であった杣と小挽き、大切な収入源であった製炭を展示。
- ・畑のしごと 焼畑は大正末期まで行われていました。急斜面の畑作はその堆肥づくり耕作法も作物も平坦地と異なったものがあります。農耕準備から収穫までの用具を展示。
- ・民家模型 茅ぶき屋根の民家は少なくなり、今はあまり見ることができない。江戸末期から明治初期の標準的な民家を3分の1の模型で復元展示。

- ・奥多摩で見られる蝶の標本・写真を展示。
- ・奥多摩の山岳地帯に生息している主な動物・鳥類の剥製展示。
8年1月13日～31日
- ・正月飾りの門棒、まゆ玉飾り。

小河内の郷土芸能

7年4月～8年3月

- ・湖底に沈んだ小河内地域に伝承されていた国指定重要無形民俗文化財の鹿島踊り、東京都指定無形民俗文化財の車人形、獅子舞、神楽を展示（毎年9月15日に小河内神社と各地域で公開されている）。
- ・写し絵の道具 廃絶したものに写し絵があります。この写し絵は、フロ（風呂）と呼ぶ木箱を使い、ガラス板に（タネイタ）に描かれた絵に光をあてて写す幻灯で、光源には石油ランプを使った。説教浄瑠璃を語りながら祭
7年4月～8年3月
- ・奥多摩の14地域に伝承されている「ささら獅子舞」の中から奥多摩湖底に沈んだ原地域現在でも9月15日の小河内神社例祭に奉納されている原の獅子舞を展示（1階中央展示室）。

企画展を契機とした 写真資料収集について

くにたち郷土文化館

くにたち郷土文化館では平成8年9月27日より12月23日まで、「変化の中で—高度成長期のくにたち—」と題した企画展を開催した。扱った資料は市役所広報課より移管された広報用の写真で、時代を昭和30年代に限定し選んだ128点を3回に分けて展示した。

昭和30年代は、日本全体が高度成長を背景に大きく変貌した時代であり、国立もまた都市基盤の整備が急激に進められ、人口が著しく増加するなど転換期を迎えていた。写真はそうした変わりゆく国立の姿を、その中を生きる人々の生活を克明に写しだしている。

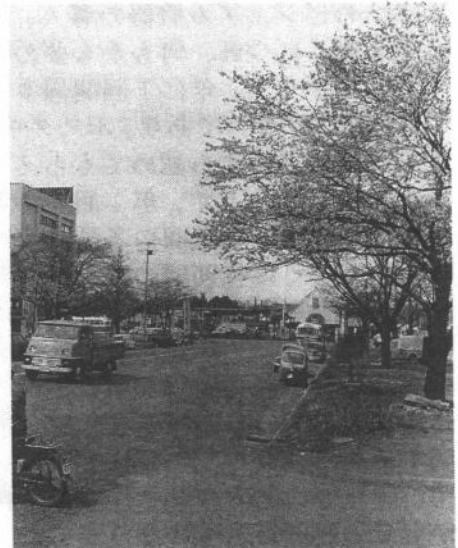
写真の中には、現代を生きる私たちが学ぶべきことがたくさん含まれている。ただ懐古するだけでなく何かを読み取ってもらいたい。そういう視点で写真を選び展示を構成した。

このような写真展と呼ぶべき企画を手がけるのは今回が初めてであり、手さぐりな部分も多く今後には様々な課題を残した。しかし、市内を7地区に分けその地区ごとに展示する、現在と比較できるように全ての写真に定点撮影写真を付けるなど、単なる写真の羅列にならぬよう配慮した。幸いかなりの関心を集めることができ、博物館における写真展として一定の成果を収めることができたのではないかと考えている。

私たちを取り巻く環境は日々変化を遂げていて、多くのものが生まれたり失われたりしている。その一方で変わらぬ姿をとどめているものも存在する。写真はそれら変化したもの、しなかったもの全てを写した貴重な資料であり、私たち共通の財産として後世に伝え、公開されていく必要がある。

郷土文化館ではその役割を担うのは博物館であるとの考えから、写真資料の収集・保存・活用に力を入れていくこととした。今回の企画展がその一つの契機になればと、市民に写真の提供を呼びかけている。

本格的に写真を資料として扱っている博物館は、おそらくそれほど多くはないだろう。「ミュージアム多摩No.17」掲載のあきる野市五日市郷土館の例などは、かなり先進的なものと思われる。当館はまだ整理方法を模索している段階だが、将来的に写真集を発刊することまで念頭において収集を進めていきたい。



見学会と講演会について

瑞穂町郷土資料館

資料館を訪れる成人は、年々その数を増やし、年齢も退職後の余暇を利用して、趣味研究から実益を兼ねて見えるようになりました。実益とは、このかつての農村地帯に、新鮮な野菜を求め、最近ブームになっている花卉園芸類の入手のことです。これも資料館の展示宣伝のやり方次第では、もっともっと訪れる人が増加するとは思いますが、特別な企画はしたことがありません。ただ、聞かれれば、その販売場所を教えてくださいあげることがあります。

さて、資料館では、開館当初からも、地域の住民向けに見学会や講座を開いてきました。そのうちの見学会については、この2～3年定着して「史跡めぐり」を実施しています。史跡めぐりの目的は、資料館活動としての役目と、これにプラス文化財保護保全をめざすことであって、ひいては町の歴史地理の学習と、地域全般を知る機会になっていると考えています。それ程広いとは思えない町域も、いざ史跡めぐりとなると、歩く距離や参加する対象者の体力を考慮しなければなりません。そのために、1日かけて回れる範囲と、見学カ所を厳選してコー

スを決定します。もちろん、見学の乗などガイドブックを用意するのも資料館活動の一環です。最近では、郷土意識は、昔から住みついた住民よりも、他地域からの新しい住民の方々の方が強いようです。講師と世話役、案内役は、資料館職員と文化財保護審議委員が当たっています。

講演会については、郷土資料館で発行している「みずほ 郷土資料館だより」で紹介済みなので、詳細は、その都度三博協関係の各博物館にはご送付していますので省略いたします。正月の一行事として郷土歴史講演会と銘うって定着してもう7年になります。これも資料館の活動としてとり上げることでできる唯一のものです。惜しむらくは、資料館に会場が設定できない悩みがありますが、現在まで視聴覚室として他団体が使用している施設が講演会場に使用可能になる日の近いことを祈るのみのこの頃です。



常設展示の一部変更と 触れる民具の展示

あきる野市五日市郷土館

平成7年9月に秋川市と合併したことによって、五日市郷土館の対象とする地域も拡大されました。そのため、地域の歴史年表や地形模型などを作り直し、あきる野市全体を網羅するよう、現在少しずつではありますが、展示の変更を進めています。

特に民俗の展示では、今まで「里のくらし」「山のくらし」「川のくらし」と、大きく三つのコーナーに分け、8割が山の五日市地区の特色である、「市」や日常生活に関連する道具、炭焼きや筏流しなどの山樵用具、川漁の道具などを展示していました。「里のくらし」のコーナーには、養蚕や農耕関係の資料も展示していますが、五日市地区の養蚕は早い段階で行われなくなっており、資料も乏しく十分に理解してもらえないところがありました。

しかし、台地上に広がる秋川地区は平坦地が多く、養蚕や畑作、さらに低位の段丘では水田耕作も盛んに行われており、古くから盛んであった養蚕関係の資料や農耕関係の資料がたくさん残っていました。これらの資料を順次五日市郷土館に収蔵するとともに、今までの養蚕関係の

展示に追加し、展示の充実を図っています。

また、民俗関係の資料は、触れる展示・動かして学べる展示としています。小学校低学年が「昔のくらし」などを勉強するため見学に来る機会が多くなっていますが、子どもたちは資料を見ても何の道具か、どのように使うものか分かりません。はじめて見る道具では、言葉で説明してもなかなか理解が深まらないのです。

そこで、実際に触って、動かして、仕組みや働きを少しでも知ってもらい、昔の人達がどのような工夫をして生活してきたかを、道具の変遷などから説明しています。特に牛首やザグリ、足踏みなどの糸取りの道具を回したり、麦臼を搗いて、唐箕をまわし、石臼を挽いて米を粉にしたりと、様々な体験をしてもらっています。



博物館の活性化について

清瀬市郷土博物館

当館は昭和60年11月1日に開館し、今年で満11歳を迎えた。これまでの入場者数は約86万人、年間で平均7万8千人程を数える。但し、この数字は併設の文化センターとしての利用者数も含まれる。文化センター部分は市民への貸出し施設ともなる講座室、ギャラリーにあたる。

博物館の開館にあたり、より多くの市民に活用してもらい、地域に根ざした博物館となるよう事業の運営方針を組み立てた。一言で表すなら「静」より「動」の博物館を目指したいということである。

まず、歴史、民俗の常設展示室は年に一度の展示替えを行う。市民参加の柱となる体験学習施設である伝承スタジオを設ける。ギャラリーで特別展等を開催する。講座、映画会等を実施する。様々な工夫が功を奏してか、市民に定着し利用者数は順調と言ってよく、開館当初の目論見はあたっている。他にも、市のほぼ中央にあり駅から約1kmの場所という立地条件や、コピーラウンジを備えている等の要因もあろう。

予想外だったのが、伝承スタジオの利用率の高さである。当初は、節分等の年中行事や茶もみの実演等、館主体で使う予定だったが、担当者の予想を反して学級のレクリエーション行事として手打ちうどんや焼きだんご作りの体験学習の場として活用されるようになった。年間約50件、ほぼ毎週のように利用があり職員の指導協力のもと行われている。特に宣伝はしておらず、いわゆる口コミにより年々増え続けている。

10年も経過すると事業のマンネリ化は否めない点であるが、現時点では、事業の質と量を維持していくのが精一杯である。現状に甘えず市民に飽きられないよう事業を展開しつつ、今後は博物館の根幹である資料の収集及び研究等に力を注いでいきたいと考えている。



入館者増加への取り組み

東京都高尾自然科学博物館

当館は高尾山の麓にある。ここは、観光客、ハイキング客、登山者、薬王院の参詣者が多く当館への入館者も「ハイキングのついで」56%、「観光のついで」23%、という人が圧倒的に多い。したがって、入館者増を図るためには、これらの人々の要望に少しでも応えるように取り組むことがたいせつである。

前回17号で入館者増を図るための対策を3点ばかり紹介した。展示内容の刷新を図ること、企画展を準備していること、開館時間の延長を図ったことである。

今回はこの外に、ちょっとしたことだが入館者に喜ばれていることを2点ばかりあげてみたいと思う。

その第一は、施設の目的外使用である。こう言えば大げさに聞こえるが、ようするに昼食をとるために講堂の使用を認めることである。従来、館内での飲食はいっさい認めていなかった。保育園、学校等から雨天時に昼食の場所として館見学のあと講堂を貸してほしい旨の要望があったが断ってきた。しかし、これを認めることにした。

目的外使用にはちがいないので、これを認めるに当たっては次のことに注意することにした。

館の見学など十分に館を利用すること、統率のとれた団体であること、あとかたづけなど事後処理が充分にできること、などである。

雨天でも安心して行事を実施できるということで大変に喜ばれている。この一年間に認めた件数は30件で今後なお増えるものと思われる。

さて、その第二は長時間駐車を認めることにしたことである。バス見学による前庭駐車は従来から認めてきたが、見学に要する時間以外の駐車は当然ながら認めていない。

ところで、保育園、学校等は博物館見学と高尾山ハイキングをセットにしている場合が少なくないので、ハイキングの間もそのままバスの駐車を認めてほしい旨の要望がある。

そこで、有料化している状況を考えながらも、保育園、学校に限ってこれを認めることにした。前庭をバスが占有するような状態になってはと、この取扱いは慎重にならざるを得ない。バスの駐車件数は年間40件で、そのうち長時間駐車を10件認めている。

さて、前号から引き続き入館者増への取り組みについて述べてきた。その効果が次第に表れてきたと考えている。入館者数をみると、取組み前の平成6年度は6万7千人であったが、取組み後の平成7年度は8万3千人となり、1万6千人増加しているからである。今後とも新しい感覚で取り組んでいきたいと考えている。

学校教育との連携について

日野市ふるさと博物館

当館では、学校週5日制に伴い、従来から毎月1回、第2土曜日に体験学習会を行ってきた。さらに最近では、より深い学校教育との連携が求められ、以下のように、小学校との連携を行っている。

I. 小学校と連携した活動

1. 昨年度（平成7年度）は「先生のための博物館見学会と懇談会」を実施した。これは小学校教諭の博物館に対する理解を深め、学校教育の中で博物館を有効に活用していただくという目的である。常設展示・収蔵庫の案内、博物館見学での利用例や貸出し資料の紹介、そして、連携のありかたについての意見交換を行った。今年度も同様に実施する予定である。

2. 博物館見学の際には、希望に応じて、小学3年生3学期の単元「日野市のうつりかわり」に関連した資料を展示し、実際に触れられるようにした。その場合、担当教諭と事前協議を行い、授業と関わりの深い資料を選び、できる限り学校側の希望に応えるようにしている。

3. 「日野市のうつりかわり」の授業で実物の資料を用いる際には、必要な資料の貸出しを行った。特に研究授業での活用が多く、これまでに児童が実際に、盥と洗濯板で洗濯をしたり、石臼で米や大豆を挽くなどの授業が行われている。また研究授業の場合には、学芸員ができる限り授業後のディスカッションに参加して意見を交換するようにしている。なお、このような貸出しに用いる資料は貸出し用に特に準備したものである。

4. 市内の2校の余裕教室で、博物館所蔵の資料を展示し、「郷土資料室」を設置した。学校側の意図に合わせた内容で、地域の資料や授業の単元に関連のある資料を選択した。授業などの活用状況に応じて、今後も充実を図る。

II. 問題点

まず、相互理解の不足が挙げられる。連携に際し、お互いに何を欲し何を提供できるのか、そして期待する効果などについて、意見交換のより多くの場が必要である。また、校内の「郷土資料室」など規模の大きい事業は、条件の整った学校に設置が限られ、今後も管理が必要となる。予算や人員の不足をいかに補うかも課題である。小学校との連携だけでも、解決すべき問題は多くある。

気軽に楽しく自然観察

東大和市立郷土博物館

当博物館は、狭山丘陵に接して建てられています。博物館のすぐ北側は、市立狭山緑地という雑木林を保全した公園です。そのため、雑木林を散歩したついでにという来館者も多いようです。博物館でも展示や映像で、狭山丘陵の自然について紹介しています。

しかし、自然関係の展示は、やはり目の前で生きてる姿をみせる本物にはかえません。もちろん、展示にはその良い面があり、野外ではなかなかみることのできない自然のしくみや動きについて紹介することができます。ただ、野外で起こる予想できない変化や、アクシデントを展示するのは難しいといえるでしょう。

自然に対して興味を持ったり、感動したりするには、野外で本当の自然に接するべきではないでしょうか。野外で感じた想いが、あとになって自然を大切にしようという想いにつながるのではないかと思うのです。

博物館では自然観察会や星空観察会など、いろいろな自然に接する行事を開催しています。しかし、年間に開催される日数は、30日前後にすぎません。

そこで、今年度から「ちいさな自然観察会～狭山緑地自然ガイド～」をはじめました。土・

日・祝日などに、館内放送や掲示板で参加を呼びかけ、雑木林を歩くというものです。時間はだいたい30分程度。その時期にあった内容で、植物、昆虫、野鳥、生き物たちのつながりや、人間との関わりなどについて、お話しています。観察中は、なるべく質問形式にし、解説者がしゃべりっぱなしにならないよう、またみるだけでなく、さわったり、匂いをかいだり、不思議な現象について考えたりと小さい子でもわかりやすく、飽きさせないように気をつけています。それがなかなか難しいのですが…。

今後も「雑木林も含めて博物館」という考えで続けていきたいと思っています。当博物館にお越しの際は、展示室、プラネタリウムとともに、ぜひ自然ガイドにご参加ください。

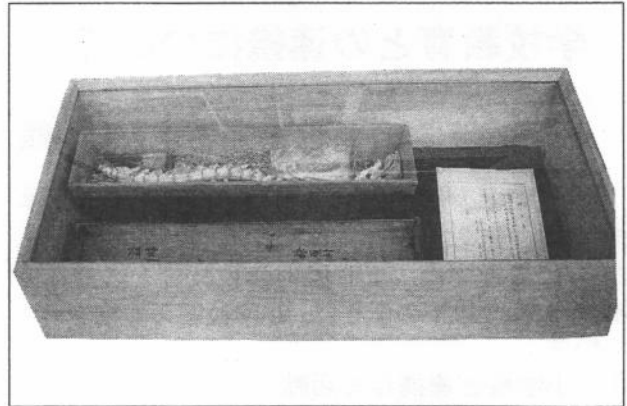
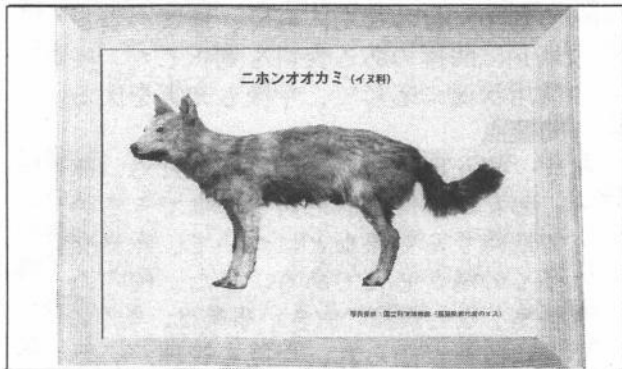


ニホンオオカミの骨の展示

檜原村郷土資料館

明治後期に、絶滅したと言われていた、ニホンオオカミの第5、6頸椎骨・胸椎骨（第1～第11）、腰椎骨（第1～第10）、薦骨、尾椎骨、尾椎骨（第1～第4）と肋骨6本を展示しています。

この骨は、明治のはじめ村内人里の住民で、吉本小兵衛と言う人が、大雨で出水した自宅近



くの河原で拾ったもので、当時は、大蛇の骨だろうと思って気味悪がり、当地区の飯網社に納めておきましたが、「魔除け」になると聞いて明治10年に桐の箱を作り、表に蛇骨匣と書いて骨を収めて自宅の神棚に祀っておきました。

昭和30年代になって、多摩郷土研究会の方々が見えたときも、蛇の骨だろうと話していましたが、その後、ニホンオオカミの権威者であります直良信夫博士が来村し、一見して「ニホンオオカミの骨」であると断言されて、昭和36年に博士より鑑定書をいただいております。

三井八郎右衛門邸公開開始

江戸東京たてもの園

江戸東京たてもの園では去9月25日より三井八郎右衛門邸（主家）が公開となりました。

名前が示すとおりこの建物は三井財閥の三井家に関わる邸宅で、財閥解体を経た1952年（昭和27年）に西麻布に建てられた建物です。戦後に建築されたといっても、三井財閥繁栄時に日本各所にあった三井家に関連する建物の部材等移して建てられており、財閥の繁栄時の勢いが窺えるつくりになっています。

建物の中で中心となるのは1897年（明治30年）に完成した京都の油小路邸の奥書院を転用した1階の書院造りの二間です。奥書院は四季之間とも呼ばれており、春夏秋冬の襖絵で飾られた四部屋からなっていました。この内の2部屋を移築、転用したのが、1階の食堂と客間の二間です。二部屋とも若干の改造がありますが、当時の雰囲気伝えていきます。

また1階の南西の隅には「望海床」と名付けられた部屋があります。この部屋は十代当主三井高棟氏が隠居所とした大磯の別荘「城山荘」から移築したものです。「城山荘」の各建物は古寺社等の建築材を再利用しており、贅沢な作りになってしまいました。「望海床」の内部にも古材が認められ、今はない「城山荘」の面影を伝えています。

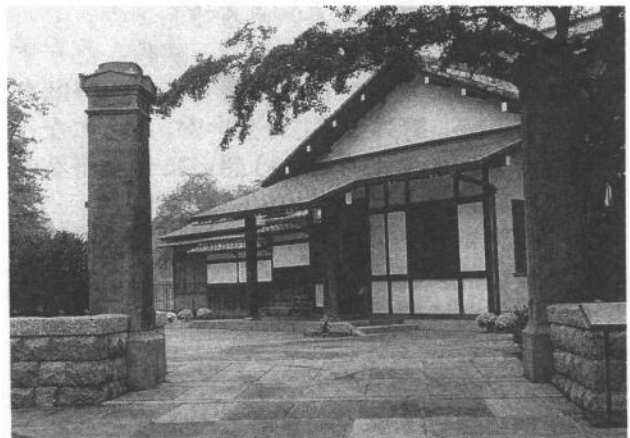
このほか、2階には三井家代々当主に関する品々で構成された仏間や、第一国立銀行にあっ

たと伝えられるシャンデリアなどがあり、三井家の歴史を多様に語っています。

以上のような構成に加え、四条円山脈の画家による日本画が襖や杉戸を飾るなど、細部にわたるまで意匠が凝らされています。三井八郎右衛門邸は江戸東京たてもの園の外の収蔵建物にはない、重厚な建物となっています。

ところで、このような繊細な建物を一般に公開するということが、今回の建物の難しい課題でした。一般的に保存することと公開することは相反することですが、屋外の環境でこの問題に向かいあうことは通常に増して難しいものでした。個別的にはレプリカで代替したり、パーティションを使用するなどの措置をとりましたが、この三井八郎右衛門邸は野外博物館活動の難しさをあらためて提起するものでした。

今後、主屋の西側に並ぶ土蔵が年度内には完成、公開となります。そして主屋の南面には名石を配した庭園が整備され、来年度には三井八郎右衛門邸の全てが完成する予定です。



『多摩のあゆみ』

—たましん歴史・美術館歴史資料室機関誌—のこと

たましん歴史・美術館

『多摩のあゆみ』は、昭和50年に当館の前身「多摩中央信用金庫 多摩文化資料室」が編集を担当、信用金庫が発行し、支店の店頭で無償で配布する「お茶の間郷土誌」となることを願って創刊されました。

「お茶の間郷土誌」とは、誰でもが書き、誰もが読める、興味を持って調べたいことがあればその手助けができるようにとの思いです。

創刊号の特集を多摩川にしたのもその表れでした。川にまつわる様々な思い、事柄、古い写真の数々。そしてその最後にさりげなく「研究会動向」のページがあります。

10号まで続くこの紹介欄には当時、多摩の各地で活動していた研究会の状況が、アンケートの回答により掲載されています。

自分の住む町にどんな研究会があるのか、私が調べたいテーマで活動している会があるのかなど、利用方法は様々でしたでしょう。まだ、現在のように多摩の各地域に博物館や郷土資料館がなかったのですから、何らかの手掛かりを求めての問い合わせも多かったのです。

学校で「郷土の歴史」を学ばなければならなくなっても、教える側がそれをわからないといっ

た事態も生じているのです。

幸いにも現在では「日本の歴史」以外の「地域の歴史」を展示する施設、民俗や文学・美術などを専門とする施設などがあります。

そこに働く学芸員や研究員は、専門性を持ち客観的にテーマを追い求め、また、狭い地域的な特徴のほかに、広く比較する対象の紹介もかねて、自分の研究を展示あるいは出版という方法で公開しています。

さらには、各博物館でも、体験学習や講座・講演会、またそれらから派生しての研究会など様々な形・組織での活動を行っています。

多摩には大学も数多く、市民講座・夜間講座なども含めれば、学ぼうとすればその機会や場所は増えているのです。

多摩に住む約380万人のうち大部分が本人かその親たちが多摩に来た、いってみるなら「移住者」ではないだろうか。だが、それも10年経ち、20年が過ぎると、「多摩を故郷に選び、多摩に故郷を感じ、故郷にしていこうと決めた多摩に定住の場を求めた人たちが明日の多摩をつくるのである」と松原治郎氏は『多摩のあゆみ』創刊号でのべています。

多摩を生活の拠所とする上で、歴史を知り、文化を核として地域社会を形成して行く、そんな動きの中で『多摩のあゆみ』が、今後も小さな支えになればと願っています。

民具の収集・展示について

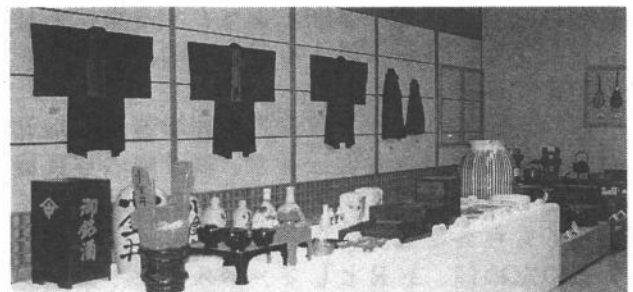
小金井市文化財センター

当館が収蔵する民具は、昭和50年に市内各地域の人々によって結成された「小金井市郷土資料保存会」の活動によって収集された資料が中心となっている。同保存会の活動は、平成3年に終了し、この間に約2,000点の民具が収集された。その後は、寄贈の申し出があり次第受入れてきたが、近年、家屋の取り壊しに伴って1軒から数100点単位で資料が寄贈される例も見られるようになってきている。とりわけ今年になり土蔵の取り壊しにより、明治～戦中期の衣類(和服)・レコード・教科書・文書類多数が一括で寄贈された。これらは、一家の生活史を知ることのできる資料であり、中でも和服が150点以上あり、近代における地域の衣生活の一端を示す資料として貴重なもので、目下整理作業を進めている。現在の民具収集は、市民から寄贈の申し出を待つといった受身的な収集であるが、今後は積極的に所在調査を行うとともに、広く情報の提供を呼びかけ、収蔵点数や、内容の充実を図る努力をしていきたい。

民具の活用については、市内の小学校に開設

した郷土資料室にも展示しているが、教材として十分に活かされているとはいえず、児童が理解できるような説明の工夫や定期的な展示替、教育課程との連携が必要と感じている。

また、企画展示として10月8日～12月23日まで、「暮らしの中の民具」を開催し、衣食住に関わる民具を分類別に約200点展示した。展示の方法としては、見学者が間近に見られるように壁面や展示台に露出展示し、和室に大型家具を置き、蚊帳を吊って戦前の部屋の雰囲気を感じるような工夫も試みた。この展示は、収蔵品の紹介が主眼であったが、今後は個別テーマを設定したり、民具の時代的変遷や使用方法等がだれにでも理解できるような展示、民具が地域の生活史を知る上でかけがえのない文化財であるという認識を深められるような展示方法を模索していきたい。



繊維博物館の活動内容

東京農工大学工学部附属繊維博物館

1. 特別展

毎年春と秋年2回ある特別なテーマのもとに展示を行っている。

特に、隔年に開かれる「東京農工大学科学技術展」は、最新の大学の研究成果を社会に開かれたものとするを主旨に行っている。

2. 生涯教育

最近子育てから解放された主婦の学習熱が強くなっているが、「身近なところに施設や教育者がいない」という問題がある。当博物館では10数年以上前からこの点に注目し、繊維に関する各種の研究会やサークルを設立し、工学部教官の協力（ボランティア）を得て、理論、技術の教育及びその実践を行ってきた。

現在活動しているサークルは、織物・ひも結び・組みひも・レース・和紙絵・手紡ぎ・藍染・紬瑠かご会・型絵染の会・手編みの会・わら工芸会及び絹研究会である。各サークルおよび20～30名で構成されており、勉学期間は4年で

修了するが、さらに専門的に学びたい希望者には、アドバンスコースが用意されている。2月中旬には、各研究会の成果を作品展として展示し、修了証を送っている。このサークルは、年度を追うごとに希望者が増え活発化している。

3. 公開講座

先端繊維、製糸技術、先端高分子等に関して本学教官を中心にして開催している。

4. 学芸員養成

現在は、本学学生のみを対象にして開講している。博物館学、保存科学、等他の講義と博物館実習をとおして、全国でも極めてユニークな工学系学芸員を養成している。

5. 子供科学教室

平成4年5月より毎月第2土曜日は、小・中学校が休校になった。また、最近では子供が理科離れを起こしており、理系学部への進学希望者が年々低くなっている。この2つの問題を博物館なりに解決すべく、平成5年より当教室を開講した。これは、大学教官の協力を得て、子供たちにとって興味のある実験をしてもらい、その体験をとおして、子供たちに科学技術に対する興味と「あこがれ」を持ってもらおうとする企画である。

博物館活動の活性化とは

立川市歴史民俗資料館

“活動の活性化”とは結果ではなかろうか。

“活性化のために何をするか”ではなく、職員やスタッフが様々な取組みを行った結果、それが活性化に結び付き、という気がする。

重要なのは事業の実現や実施にむけて、職員やスタッフがどんなことに気を配ったか、何に工夫を凝らしたか、ということであろう。

そこには、職員やスタッフによる企画段階の目標や目的の設定があり、それを実現させるための具体策が必要である。これがいかに明確で、整理されているかで、事業の成否が決まる。

いいかえれば、事業に参加してくる市民などに対し、職員やスタッフがどれだけ“意図的なはたらきかけ”ができるか、ということである。

ある事業における目標や目的、それに向けた具体策が明確であればあるほど、また整理されていればいるほど、参加しようとする者にも分かりやすく、事業に対する参加者の反応もつきやすくなる。

今年当館では、社会教育課生涯学習係・地元の獅子舞芸能保存会の三者で、獅子舞の写真展を実施した。目標は、市指定無形文化財を広く知ってもらうこと。

そのために、PRとして、ポスター・チラシの作成・配布、市広報や一般紙・地域CATV



などへの情報提供をそれぞれが分担した。また、展示写真の引伸ばし費用は、三者三様に負担し、終了後は伸ばした写真をそれぞれの資料として活用することにした。

この結果、2週間の展示期間中、新聞やCATVで紹介されたこともあって、1,500名をこえる人々が見学し、所期の目標は一定の成果をあげたといえる。

しかし、上記の視点から今回の展示を振り返ってみると、企画する側の工夫はあったが、見学する側へのはたらきかけが少なかった面は否めない。この点は、次に向けた課題である。

共催事業に関わらず、一つの事業に取り組み、必ず次回への課題が出てくる。様々な取組みを試行し、事後に総括をして蓄積していくこと、このことが結果として、博物館活動の活性化をもたらすのではないだろうか。

参加型博物館への提案

八王子市郷土資料館

最近、館職員の一人が埼玉県立博物館の「特別展」を見学に行き、先方の副館長ほか学芸員諸氏と懇談した。この中で、博物館の将来像は、大きく体験・参加型になるだろうということが改めて認識された。そのためには、従来最重視してきた通史展示は、いかなる位置づけと内容になるのか悩むところ大ということであった。

近頃新設される博物館は、大型館をのぞくとテーマ館が多い。地域博物館にはとくにその傾向がある。こうなると通史展示はごく限られたものになり、かなり容量よくまとめても地域史すら不完全になる場合がある。これでもまだ、その地域のテーマという特色をだしている以上やむをえないところであるが、「県立博」はそうもいかないというのである。

そこで聞いた興味ある話は、常設展も体験・参加エリアの中に位置づけようとする方向性である。何をやろうというわけでない、通史としての展示が、今よりも分かりやすく、親しみ深い状況を作り出せばよいことなのである。このためには、展示の原点から検討を要することとなるらしい。

体験・参加型の主役は子供たちだ。彼らに合

わせて、常設展を一挙にやさしい内容にするわけにはいかない。事実、平易にすることは難しいことなのである。こうなると展示とそれを見る子供たち（一般人も同じだろう）の間に入って理解のいくよう説明する担当が必要となる。大型館には展示解説員を擁しているところがあるが、かなりの勉強家でも子供たちの質問に納得のゆくよう説明することは難しいようである。質問の意図が汲みとれない場合が多く、また、子供たちに対する話し方にも問題があろう。

そこで提案であるが、経験ある学校の教員を博物館に入れたらどうかということである。先の県博では、かつて教職からの転出によって博物館に配属された先生がおり、この先生がする子供たちや一般人の指導・説明は抜群であったという経験をもつ。また彼が考える参加型の企画は、従来の枠を越え、なかなか新鮮、好評を博したという。

本館でも、現任教員が博物館実習を受けたことがあり、その後、子供たちと博物館活動に良い理解者となっている例もある。

埼玉県博では、常設展を体験ゾーンと同等に扱う方向性を模索する中に、こうしたユニークな人的配置を念頭においている。

さて、市町村の地域博物館では、このようなことが可能なのだろうか。制度的にはできないといっても、将来の博物館活動の領域を広げるためにも、何か方法は無いものだろうか。

平成7年度活動報告

福生市郷土資料室

■文化財保護行政事業

1. 文化財保護審議会の開催（会議の開催及び視察の実施）

2. 市登録文化財の新規登録（第50号・第51号・第52号）

森田家旧蔵製糸関係等資料（有形文化財）

森田家旧蔵俳諧等文芸資料（有形文化財）

森田美知子他着用の和服等資料（有形民俗文化財）

3. 文化財総合調査の実施

寺社美術品調査（彫刻・絵画）

民俗調査（衣生活）

民具調査

熊川分水調査

遺跡確認調査（14号遺跡内、4号遺跡内）

長沢遺跡第9次発掘調査（原因社負担）

4. 文化財保護思想普及用刊行物の発行（『ハンドブック福生の自然』3,000部）

■郷土資料室事業

資料の収集 16件5,366点

資料の保管 文化財収蔵庫の建替（軽量鉄骨2

F、127.52㎡）と収蔵庫の消毒

普及事業（展示・学習会）

・特別展示「福生市の中世大量埋蔵銭」開催

・記念講演会の開催

・展示解説書の発行

・企画展示「きものが語る明治・大正」開催

・展示解説会の開催

・子供対象博物館見学会

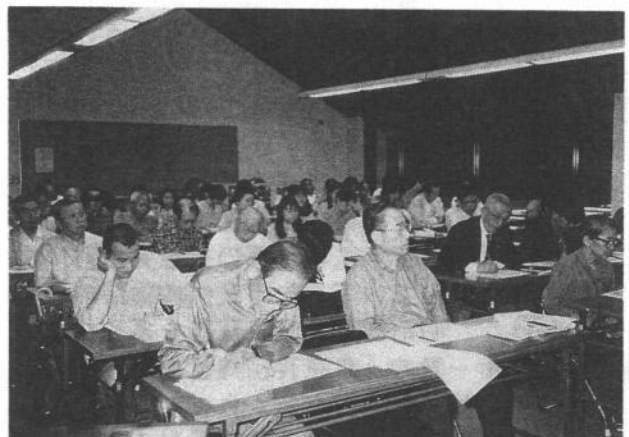
・『年報15号』の発行

5. 市史の普及と刊行物の頒布

市史を読む会の開催

縄文時代編、中世編の実施

多摩郷土誌フェア参加



当園における 市民ボランティアの活用

東京都井の頭自然文化園

当園は動物園、植物園、水族館、彫刻美術館
その他アミューズメント施設を一同に有する総
合公園です。吉祥寺駅、井の頭公園などに近接
しており、都市近郊型の行楽地として、多様な
ニーズを持ったお客様が来園します。

そんな当園で、来園者接遇の補完的役割を担っ
ているのが「シルバーガイド」と呼ばれる無償
ボランティアの方々です。「シルバーガイド」
は高齢者の社会参加やいきがづくりを目指し、
社会福祉法人・東京都社会福祉協議会が昭和62
年に発足させた事業で、平均69才の高齢者の方
々が都立の4動物園（公園）でガイド活動に従事
しています。

当園のシルバーガイドは総勢57名、火曜から
土曜までの曜日ごとの班で構成されています。
基本業務は、園施設の案内、モルモットコーナ
ーでの抱き方指導等の来園者接遇、園行事への協
力等がありますが、各人の興味や得意分野に応
じ、動物、植物等の解説や自主行事の開催など
の自主的活動も尊重されています。



ひよんなことから ～迷子石のことなど

町田市立博物館



八王子市に住
むIさんは多摩
域の道祖神塔に
ついて詳しく、
『日野市誌』の
石仏編などの調
査執筆を手懸け
ておられる。そ
のIさんから最
近の仕事として、
『三鷹の石造物』
(1996年3月・
三鷹市教育委員

会)が贈られてきた。総頁が250頁を越える立
派な本である。何気なく頁を繰って目に止
まったのが、三鷹市大沢の国際基督教大学(I
CU)構内にある迷子石。迷子石というのは迷
子を探すために造られた石塔で、例えば正面に
「まよひごの知るべ」、右側面に「知らせるかた」、
左側面に「たつぬるかた」と刻み、そこに迷子
の似顔絵や特徴を誌した紙を貼るようになって
いる。中央区の一石橋の袂にある迷子石が有名
で、これは昭和17年に東京都の指定文化財(歴
史資料)になっている。先年私が博物館の仕事
で手懸けた、明治初期の東京風景を多く描いた
錦絵師昇斎一景の「東京神田萬世橋賑之図」に
もその橋の袂に迷子石が描かれていた。

兵庫県立歴史博物館のSさんは私の若い友の
一人だが、彼は日本各地の迷子石について詳し

く幾つかの論文も書いている。そこでICUの
迷子石の報告のコピーを送ったところ、思いが
けない返信が戻ってきた。神田萬世橋の迷子石
は現在所在不明だが、『東京市誌稿市街編五六』
に設置許可願いの文が記録されており、銘文を
較べると多少の異同があるもののICUの迷子
石はそれらしい、というのである。そこでIC
Uにある国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館
に問い合わせると、詳しいことは不明だが幕末
の蝦夷地探険家松浦武四郎縁のものらしい、と
いう回答があり併せて同館編によるヘンリー・
スミス著『泰山荘 松浦武四郎の一晝敷の世界』
(1994年)が届けられた。武四郎は晩年古器物
蒐集家として名を馳せ、その成果の一つが日本
全国各地の社寺や歴史的建造物の古材を入手し
明治20年に完成した「一晝敷」と呼ばれる書齋
である。この書齋は武四郎の偉業を偲ぶ人々
によって各地を転々としながら守られ、やがて昭
和14年に三鷹市大沢の茶室庭園泰山荘に移築さ
れる。そしてこの地が戦後にICUのものとなり
現在に至るといふ。萬世橋のものかと思われ
る迷子石は現在泰山荘の一角に所在するが、当
初から武四郎縁のものなのかどうか、また実物
なのかどうか今一つはっきりしない。しかしそ
ういうものがある、ということが分かっただけ
でも興味深いことであつた。スミス氏の著作は
今一つ私が追い掛けている別の問題についても
大きな示唆を与えてくれたのだが、それについ
ては改めて書こう。

こんなことがあるので博物館暮らしも満更で
ない、と思う次第である。

復元民家とことばの響き

府中市郷土の森博物館

毎月第2土曜日の午後、郷土の森園内の復元民家越智家では、“森のお話会”が開かれる。当館では一般の博物館のイメージからするとかなり広範囲の事業を行っているが、これもその一つである。対象は5歳以上、であるから70歳80歳でも一向に構わない。イロリ端で昔話や世界の民話を毎回3話、語り聞かせるものである。

そもそも民話等を語り聞かせる、という事は、まだ書物が子供達の間を広まらない時代には、庶民の家庭の中で、祖父母や父母から子や孫へ伝えられていたものである。それを集団で聞く事が日本で普及したのは、第2次大戦後の幼稚園、保育園教育の他、松岡享子さんを中心としてアメリカ型のストーリーテリングを導入し、広めていった各地の図書館での活動に依るところが大きい。耳から入る言葉だけを頼りに物語を想い描くことは、即ち想像力の豊かさを育てる事もある。

現在、当館には8棟の復元建築物が移築復元されており、景観としてだけでもそれなりの意味はあるのだが、これらを“生かした利用”をする事は我々の当初からの課題である。カヤ葺き農家である越智家住宅にもお年寄りがみえる

と、非常に懐かしがって喜んでくださる。しかし、懐古の情を醸すだけで博物館の展示物がいわけではない、という辺りからお話会は始まった。

何より幸だったのは市の図書館や家庭文庫での語りをしていらした2人の話者を得た事だった。「たった1人でも聞いてくれる子がいれば語り続けてあげる」というのが彼女たちの言葉だった。そして、毎回3話の中には1話は日本の昔話を入れる事とした。確かにほの暗い民家の中でのそれは実によく似合う。しかし聞いているのは現代の子供、世界中の情報の中で毎日を送っているのである。彼らにとってはカタカナ名前のお話も何の違和感も無い筈なので、外国の民話も、創作物も積極的に取り入れている。

10年近くの経過の中で、聞き手の中から志願者が現れ、現在では12名の語り手が「十兵えお話の会」として勉強会を続けながら交代で語ってくださっている。大抵30~40人は聞きに集まるし、常連もいる。この子達が大きくなって、「この家でお話聞いたよ」と言う様になった時、博物館の資料として移築されてきた越智家住宅は、博物館の利用者である個人と確かな結びつきを持ってその人の中で生きた建物になれるだろう。

百年、千年を単位に生き延びてきた資料を相手にする博物館の仕事。数十年先に答えが出るのが楽しいな事業があってもいいと思っている。

郷土学習室と土器作り

調布市郷土博物館

学校教育との連携については様々な取組みがあるが、当館では直接学校現場に入り込んでいる活動二例を紹介したい。

まず一例は学校のいわゆる空き教室を利用した「郷土学習室」である。多摩地域でも状況は個々に異なると思うが、調布では生徒数の減少が著しく、現在21校ある市立小学校でその大半で空き教室が生じている。こうした状況を背景に学校側からの博物館資料の展示などの要望があり、また博物館側にもこれまでの活動で収集した資料で重複する資料など対応が可能であることから「郷土学習室」を設置することになった。

「郷土学習室」は現在小学校4校に設置しているが、いずれも規模は一教室を使用し、農具や生活用具、また遺跡に隣接する場合は当該遺跡からの出土遺物などをパネル解説とともに展示している。現状では授業に際しての利用がほとんどで、生徒の安全あるいは資料の保全の立場から図書室のような利用形態には至っていない。今後は資料の入れ替え、学芸員の解説など

この室を足掛かりに連携を一層深めればと考えている。

二例目は「土器作り」で、開館間も無い頃から博物館の体験学習の一環として実施していた事業を、10年ほど前から学校用にアレンジした事業である。毎年小学校2~3校で図工の授業として行い、対象は社会科で歴史を習う6年生が多い。

内容は一人1kg粘土を使用し、輪積み法で土器を作成し、乾燥を待って野焼きを行うもので、事前の説明から焼成まで授業時間にして10時間程、日数にして延3日を要する。こちら側の負担、また学校側も野焼き用の薪の準備をはじめ通常の授業に較べて負担も大きい、その分いつもと違う授業に子供達も新鮮さを感じるようである。



博物館講座

「博物館て何だ？」の試み

豊島区立郷土資料館

当館は開館して12年目を迎えたが、未だ資料館の存在を知らない区民がかなりいる。これは当館が複合施設の7階に位置するという立地条件の悪さに加え、広報活動に熱心でなかったことにその要因がある。一方で、近年は「博物館ブーム」といわれ、博物館が世間の注目を集めている。しかしその多くは、博物館の展示のみに関心が向いており、博物館利用者も展示見学を目的としている場合がほとんどであろう。当館では、これまで博物館を理解してもらう努力に欠けていたことへの反省と、偏った博物館ブームへの懸念から、博物館の様々な活動や問題点をより多くの方に知ってもらい、多様な博物館利用のあり方を共に考えていくことが大切であると感じ、市民のための博物館講座を企画した。

第1回（1993年度）は「地域博物館」をテーマに、講演「なぜ、いま地域博物館なのか」と見学会（当館・平塚市博物館・川越市立博物館・新宿歴史博物館）を実施した。本講座で留意した点は、①活動紹介だけでなく問題点や今後の課題について現場の学芸員に率直に語ってもらうこと、②展示室だけでなく、収蔵庫や事務室、作業室など博物館の裏側も見学すること、③見学後に学芸員と参加者が話し合う時間をとり、

館活動の活性化について

板橋区立郷土資料館

バブル後の影響が館活動に多大な影響を与えていることは、当館に限らず他の多くの館にも共通する事項であろう。年々減少し続ける予算を睨みながら、如何に効果的な展示会を催行するか、あるいは市民参加型の教育普及を効率良く進めるかなど、むしろ今日の景気不況の折りほど難問山積みの状態の中で、実際効率の良い館活動を導くことの難しさを感じている昨今である。そうした中で、予算当局を始めとする行政当局の方針は、経費削減化のための無駄のない経営効率の向上をうたう。博物館が地域の行政枠内で行いうるものというのは、館活動に従事する職員自身が一番良く知っている。

当館の館活動は、バブルの時期に建て替えた際の予算と人員配置の面を考慮しても、数年前と今日とでは、そう大きな変化がない。但し、予算の面を取ってみると、平成元年と来年9年度ではほぼ半減した数字になっている。人員数面ではほとんど変化していない。その間の事業数で見ると、学芸員2名の体制は変化なく、展

近隣博物館紹介

意見交換を行うことであった。参加者の反応は比較的良好で、博物館の多様な仕事や、収蔵庫不足の問題などを認識する機会となった。

第2回（94年度）は、文書館機能をもつ博物館を取り上げ、講演「地域博物館における文書保存とその活用」と見学会（小山市立博物館・八潮市立博物館）を行い、第3回（95年度）は「地域の産業と博物館」をテーマに、講義と見学会（葛飾区郷土と天文の博物館・太田区立郷土博物館・相模原市立博物館）を実施し、資料収集や地域調査の新たな取り組みを紹介した。

以上のように、本講座では、見学先の博物館の理解と協力が不可欠であり、事前の担当者間の打合せや下見を十分に行うことが大切である。特に博物館の裏側を見せたり、市民と意見交換をすることなどは、日常の業務ではまずあり得ないことであるから、博物館によっては迷惑に感じる場合もあろう。しかしこうした機会をもつことにより、博物館と市民の距離が縮まり、市民の博物館への親しみや理解もよりいっそう深まっていくことは確かである。ここに紹介した当館の活動は、ほんの小さな試みにしかすぎないが、今後も各地の博物館の協力のもとに博物館講座を続けていくことで、博物館相互のネットワークはもちろん、博物館と利用者との輪をもっともっと広げていけたらと願っている。

示年5回から4回へと減少したものの、講座数は年3回へと増加している。展示は特別展2回、企画展2回からなり学芸員が2名で各1回をこなしていた。それに加え資料購入、修復、複製の諸段取りと、資料受入れ、カード化、接客対応、実習生受入れ、調査活動と多忙を極めていた。このような学芸員を取り巻く環境の厳しさの中で、新たな館活動の活性化には、学芸員が主軸の館運営の方針を転換して事務局及び文化財専門員（非常勤）による、新規事業の展開が不可欠である。今年度から文化財専門員による企画展示を分担させる方向で進め、新風を吹き込むことに成功した。しかし、展示以外の講座を始めとする教育普及分野は、規定の内容及び方針のものは事務局側で担当できても、新規事業を展開することはほとんど不可能に近い状態である。学芸員及び文化財専門員は助言程度といっても、実際には企画・運営全般を補佐しなければならず、事務局が単に予算執行に終始する状況では、清新な館活動の活性化を望めえない。実は、館の活性化とは硬直化した組織の再編成を促すことかと勘繰る向きもある。事務員は異動しても、学芸員等の専門職の新規入れ替わりが容易でない中で、現状は学芸員の孤軍奮闘を期待する図式を変えられないでいる。

地域研究型特別展をめざして

平塚市博物館

筆者の勤務している平塚市博物館は、平成8年で満21年目を迎えた。中都市の地域博物館として、どんな活動がふさわしいのかを模索してきた20年だったが、ここでは特別展に焦点をあてて、その特色を紹介してみたい。

平塚市博物館がこの21年間に開催した特別展は、合計64タイトルになる。その中心は、日常的な館活動の中で行われている地域研究の成果や収集した資料を紹介するもので、いわば地域研究型の特別展である。全体の約3分の2が、こうした性格の特別展であった。その他は、公募写真展や県からの巡回展などだが、コレクションをまるごと借用しての展示は数回しか実施したことがなく、その点で多くの館の運営とは異なる特徴を持っていると思う。

具体的ないくつかの特別展について、その展示までにの経緯を紹介してみよう。平成7年度の夏に開かれた「平塚の空襲と戦災展」の場合は、その準備は平成元年に「空襲と戦災を記録する会」という行事が始まった時にさかのぼる。この会では、会員とともに空襲体験者への聞き取り調査を行うなど、埋もれた記録の発掘に努めていった。また、常設展示室の寄贈品コーナー

では、毎夏に空襲関係資料の展示を行い、同様な資料の寄贈を呼びかけてきた。こうした活動を続ける中で、蓄積されてきた情報と資料で、特別展の開催となったわけである。

平成4年度の冬に実施した「砂浜の発見展」の場合には、普及行事と綿密な関係を持つ形で計画された。平成2年から「漂着物を拾う会」をスタートさせ、毎月1～2回、平塚海岸で漂着物を拾う活動を続けていたのだが、興味深い資料が集まってきたので、それを一堂で紹介する特別展を開こうということになったのである。展示の準備作業にも拾う会の会員の協力があつたことはいままでのない。

このような、地域研究型の特別展を開いていくメリットにはどんな点があげられるだろうか。その第一は、特別展を催すことが、館の収蔵する資料と情報の充実に結びつくということである。たとえば、「鳴く虫展」を催したことで、直翅類のコレクションは神奈川県一の内容を誇ることになった。また、日頃の館活動に具体的な目標ができ、調査、収集、普及などの諸活動を、特別展を目標に集約していくこともできる。

地域博物館の特別展にはいろいろな性格のものが考えられようが、安易な資料借用に頼るのではなく、市民参加を得ながら、自前の資料と情報で特別展を催していく努力を、もってしていくべきではないだろうか。

博物館と学校教育の連携をめざして

入間市博物館 ALIT

博物館は歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する研究、調査、資料の収集・保管と展示を通して、市民の利用に供し、その教養・調査研究レクリエーション等に資するという機能を有している。つまり、調査研究機関であるとともに、教育機関としての機能も有している。このことは図書館・公民館等への協力・援助とともに「学校等の教育・学術または文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助する」と博物館法に明記されていることから明らかである。

現行の学習指導要領において「わが国の文化・伝統の尊重と国際理解」が大きく取り扱われ、各教科領域にこの趣旨を受けた内容が盛り込まれている。これを達成する上で博物館の活用はきわめて効果且つ有意義であると言える。

また、同様に重視されている「主体的に学習する力の育成」や「生涯学習の基礎を培う観点からの、自ら学ぶ意欲と主体的な学習の仕方を身につけさせること」にとっても博物館の活用は意義あることである。

学校教育においても博物館の収集した膨大な

情報の中から必要な資料を選択し、活用することは教師の積極的な教材研究につながり、児童生徒にとっても、より身近で親しみやすい教材を利用した授業に接することとなる等の点から望ましいことと言える。

しかし、従来行われてきた博物館の見学等は遠距離にあることとか、実施回数も6年間に1回だけのものであったり、利用学年と学習内容も一部しか整合していない「遠足兼用」のものであったりした。

入間市博物館の開設に伴い、博物館と各学校が十分な連携をとり、効果的な活用が図れるように開設時より入間市博学連携推進委員会を発足させた。

入間市内の小・中学校27校の博物館を利用した授業の実践的な研究と普及を行うことを主目的に、10名構成で任期は1年間とした。

平成5年度から始めて今年で4年を経過するがその間、児童生徒のためのワークシート作り博物館を利用した授業研究会を行ってきた。ワークシートも小学校3年生から6年生までの社会科、中学校の社会科、お茶に関するものを作成した。

また、今年度は小・中学校共通の理科も作成し、来年度は社会科と理科、お茶を合わせた総合ワークシートの作成をめざしている。

多摩六都科学館

多摩六都科学館は、小平市、東村山市、田無市、保谷市、清瀬市、東久留米市の六市が共同で設置し、運営している施設である。

施設の目的は、子どもたちの創造性を育み、科学の心を養い、各世代の人たちの教養を高める等、文化の向上を図っていくことを目指している。

平成6年3月にオープン以来、入館者は8年11月に40万人を超し、六市以外からも多くの方が利用している。

施設概要

展示 展示と来館者との対話がより深められ、科学に親しみがもてるよう、体験型の展示に主眼をおいている。展示室は“宇宙・生命・生活・地域・地球の科学”の五つの部門から構成し、展示物107点を展示している。

プラネタリウム ドームは傾斜型で27.5mの世界最大級の規模を誇り、座席数は254席でゆったりと観賞ができる。また、各座席にレスポンス・アナライザーを設置し、観覧者との触れ合いを大切にしている。

プラネタリウムの投影は、四季折々の星空、星座やそれにまつわる伝説をとりあげ、年齢層や雰囲気に合わせて解説に努めている。

テーマ番組は年4回入れ替えて、各年齢層に判りやすく、夢や感動を与えられるような番組を作成し投影している。また、平日には、学校専用の学習番組を投影し、授業に合わせた内容と解説により学習効果をあげている。

全天周映画 プラネタリウムのドームスクリーンに70mm映画を上映している。

作品は年2回入れ替えて、誰もが楽しめる娯楽性を加味した作品を上映しており、臨場感あふれた迫力ある映像は多くの人を魅了している。

学習室 パソコンや科学に関する教室を開催しており、パソコン教室では、基本的な操作を覚えながら、機器類に慣れ、パソコンに親しんでもらうことを目的として、各年代別に実施している。

また、科学教室では、疑問の追求や解決により、科学実験の面白さを味わってもらい、工作教室では、試行錯誤の体験や忍耐及び創造性等が身につくような内容を取り上げている。

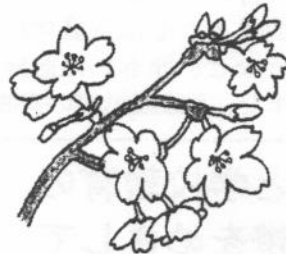
所在地 田無市芝久保町5-10-64

☎ 0424-69-6100

ホームページアドレス <http://www.bekkoame.or.jp/~tamarokuto/>

開館時間 午前9時30分～午後5時

休館日 毎週月曜日・祝日の翌平日・
年末年始(12月28日～1月4日)



編集後記

三博協会館は、今や24館を数え、相互の情報交換や提携がますます必要であり、機関誌の果たす役割も大きくなっています。近年、市民の博物館活動に対する期待や関心の高まりの中で、多様なニーズに応えるため、展示や教育・普及活動に日頃工夫を重ね、苦勞されていることと思います。そこで、①学校教育との連携、②市民参加の博物館活動、③特色ある企画展示・講座・収蔵品、④館の活性化、⑤その他のテーマで原稿をお願いしました。

また、新たな企画として、区部および近隣の博物館から有益な情報やご意見をお寄せいただきました。快諾された各館にお礼申し上げますとともに、この企画がさらなる交流の輪を広げるきっかけとなり、三博協の活性化につながれば幸いです。

今年度、東村山ふるさと歴史館がオープン、羽村市郷土博物館が開館10年目で常設展示をリニューアルしました。二館とも明確なテーマに基づく新しい展示が試みられており、今後の活躍が期待されます。

ミュージアム多摩 No.18

発行：東京都三多摩公立博物館協議会
会長 青梅市郷土博物館長 原島英雄
〒198 青梅市駒木町1-648
☎0428-23-6859

編集委員：くにたち郷土文化館
東大和市郷土博物館
東村山ふるさと歴史館
小金井市文化財センター